
魔法騎士と精靈魔法師

銀の幻想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法騎士と精霊魔法師

【Zコード】

Z6914W

【作者名】

銀の幻想

【あらすじ】

世界の全てを破壊しつづいていた彼は狂っていた。過去に無理矢理行われた人体実験により、最強の体と魔法力を手に入れさせられたがその代償は精神異常という最悪の結末により世界は滅びかけた。しかし最後の最後に精霊魔法使いと名乗る女が彼を止めて……。剣と魔法の異世界ファンタジーです。

この小説の更新スピードは結構遅めです。

彼戻ル（前書き）

はじめての方は初めまして。久しぶりの方はお久しぶりです。
今回はオリジナル小説です。
作者は文章書くのが下手だと思つので、アドバイスなどあつたらお願
いします。

ある広い部屋で男と女が戦っていた。

しかし、それは戦いと言つてよいものではなかつた。

男は狂つた様に戦つているが、女は余裕の表情で椅子に座つたまま男がやることを眺めている。

男の容姿は背中に羽が生えていて、体中汚いものがついていた。逆に女は清楚な身なりをしており、他の人たちから見たら美人と言われそうな身なりだつた。

女の前には見えない障壁のようなものがあつて、男の攻撃は全て防がれる。攻撃を放つても女の前の空間をゆがませるだけである。だが女が攻撃した場合は違つた。

女が手に持つ扇子をふわりと、軽く煽いだだけで男の身体は四方に飛び散る。

でも男は死はない。破損した身体が元の場所に戻り再生するのだ。再生したあと、再び男が攻撃を仕掛け始める。さつきからこれの繰り返しであった。

「あははははーー！ 最上級魔法術 直線魔法 キサグラム！」

男は狂ったように笑いながら何かの呪文を唱えた。

男が手をの方に向けて、自身が持つ最強の1つの魔法を放つ。男の手の前に魔法陣が現れ、さらにそれを囲むように6つの魔法陣が現れる。そしてそれの魔法陣を結び、星型の紋章が浮き上がる。そこから白い巨大な閃光が女に向かつて放たれる。その威力は町を1つ軽く破壊するほどの威力を持つのだが、今回もただ女の目の前にある見えない障壁をゆがめただけであった。

「ふふ。何度も無駄じゃと、わざから言つておるのじやが？」

「知らねえなーー！」

女が余裕の表情を保つたまま男に話かけるので、男はイラッとしたように乱暴に言葉を返す。

「そんなに慌てなくとも、時間はたくさんある。ゆっくりしていけ

「……ちゃんと殺してやるから安心しろー！」

男が自身の横に提げている剣を抜き女に斬りかかるとする。女はただその様子を見つめているだけだ。

「パン！」というかなりでかい音が部屋に響きわたる。男の剣が女の障壁に弾かれた音だ。

「クソッタレが！！」

「言葉使いが悪いぞ、小僧」

そう言つて女が扇子をまた煽ぐと男はまた粉々になつて砕け散つた。勿論剣など見る形もない。

が、やはり再生する。

「……ん？」

今度男が再生した形はさつきまでとは違う形になっていた。右腕がまるで鋭い槍のような形になっていた……。

「ああああああああ！」

それを女の障壁に向けてぶつけた。ちなみに移動スピードは常人の目では捉えられないような速さだが、女にははっきりと姿が見えていた。

キュイーン！ という音が部屋中に響く。

今度もまた攻撃が障壁に阻まれて、男の右腕が吹き飛ばされた。が、吹き飛ばされた腕の中からさらに腕があり、もう一度障壁に攻撃を加えると障壁が砕け散った。

「！？」

「終わりだあ……」

そして男が女に向かつて殴りかかるとして…………人差し指1本で腕を受け止められていた。

「！？」

今度は男が驚いた。

障壁をぶち破った瞬間にすぐさま対応されるとは思ってもいなかつたし、それに自身の攻撃が指先一つで防がれるなんてことは夢にも思つてなかつたからである。

「凄いの。私の障壁が破られたのは初めてじゃ」

そう言つて女は今度は扇子ではなく、自分の手を扇子のよつよじて煽いた。

ふわーと風が男の方に少しだけ行つたかと思うと、その瞬間に男は首一つになつて体は吹き飛んでいた。今度は体は再生しない。

「あれ……？ 身体が……ない？」

「……そんな姿になつてもまだ生きているのか」

女は呆れたよつに男に向かつて言つた。

「悪いが精靈魔法を使わせてもらつた。お前の身体はもう再生することはない」

「精靈魔法……？」

「知らないのか？ 私は最上位精靈魔法使いじゃ。私の障壁が破られたのは初めてじゃ、誇りに思つてよいぞ」

「……悪い、狂つてた時の記憶が曖昧なんだ。お前の言つてることもあんまり理解できない」

「なんと、それはそれは！」

女はなぜか愉快そうだった。

男は首だけで何も出来ないので、ただ女の様子を見ていた。

「ふむ。お前がどうしてそうなつたか、少し気になるのだが見せれもらつても構わないか？」

「……好きにすればいい」

「では、失礼する」

そう言つて女は立ち上がり男の首を持ち上げてから、また元の場所に戻り、自らの頭と男の頭をこつんとぶつけた。

「ふむふむ。 大体わかつてきただぞ」

ナウ言ひながら女は男の首を自分の太ももの上に乗せて言つた。

「すげえ居心地悪いんですけど」

「なるほどなるほど。 16歳の時にあの奴隸大国に奴隸として連れて行かれ、そこで人体実験を76回されてその身体になつたのか。 ふむ、お前の身体にも精靈魔法がかかつていたようじゃな」

「そういえば……そんなこともあつたけ……？」

「んん？ そういえばお前は狂つっていた時の記憶はないんじゃったな？」

「……少しば、記憶にある」

「せうか、では続きを読むらせてもらひつが、よこな？」

「良いつて言つてるだろ」

「そうじやつたな！」

女は笑いながらまた男の頭を自身の頭にぶつける。

「そこから改造された身体で奴隸大国を潰し、他の国も全て破壊してきたのか……なんと、私が少し目を離していくうちに人間はお前が全員殺してしまつたか！ それに、魔物の森もほとんど焼き尽くすとは……なんと面白い！」

「面白い？ どこが面白いってんだ！？ こんな体にされだからどうれだけ酷い目に遭つたと思つてんだ！！」

「まあまあ。 落ち着くのじや。 今読み取つて差し上げる」

「……ひづ」

しばらへ女は田を瞑つて何かを思考しているように見えるが、どうやらまた男の過去をよ読み取つてゐるらしい。

「その実験で約5年間使い、そこから魔法の訓練をさせられ、さらに10年。それだけの時間でよくここまでやれるような力が付いたな、まあ最強には程遠いが」

「あの俺の力が最強じゃないと？」

「うむ。力を得ることなら誰にだって出来る。本当に強い者といつのは、力ばかりには捕らわれてはいない者のことじや。」

「まあどうでもいいことだな。その力で俺をこいつに呑ませた奴らに復讐出来たんだからな」

「なるほどな。それから再生能力と自身の強力な魔法の力で本国を潰し、周りの国を潰して行つたんだな？ そんなことして悔んだりしておらぬのか？」

「……ああ。俺を売った親も殺してやつたよ。親を殺したって、何の後悔もないさ……」

男は諦めたように言った。

「そんな声で言われても後悔があるようにしか見えんのだが……」

女は困つたよつて言った。

「ただ……」

「ん？」

「一つだけ、あるんだ」

「ほつ」

女は黙つて男の話を聞く。

「自分の国を潰すときだつて、俺はやりたくてやつたわけじゃないんだ。体が勝手に動いてくし、口は言いたくもないことばかりしゃべりやがるし……つてもこの状況じゃあ、俺はただの大量殺人者だ」

「それはそうじゃな」

「でも、俺は殺されるたびに言葉だけは少しの間普通に話せるようになったんだ。なぜだかわからないけれど」

「それはお前に掛かっている精靈魔法が身体を再生させるのに必要になったから、ということだろう」

「それで俺は自国を潰した後、次の国に行つた時、俺は周りの奴らに取り押さえてもらつことが出来てたんだ」

「ふむふむ、続きを」

「そこで俺は地下牢だつたか、どこかは忘れていたけれど、閉じ込められていた。そのまま永遠に縛られていたかった。多分そこにも精靈魔法とかつてのが掛かってたから俺が力で破ることも出来なかつた」

「なぜ脱出できたのじゃ？」

「そこによ……馬鹿な奴が来てさ、そいつの姿はぼんやりとしか覚えてないけれど女性だった。で、今でもはっきりと覚えてることがあるんだけれどよ、俺の繩を解いちましたんだ……そいつは、俺に向かつてこう言いながら。『貴方の目は狂つてなんかいない。きっと何かの間違いで捕まつたんだろうから、逃がしてあげるね。』つてな。俺は初めてそいつを殺したくないって思った。でも俺の身体は言つことを聞かなかつた。殺してしまつたんだよ……繩を解いてもらつた瞬間に！」

「……」

「そこから、俺の記憶は完全にないんだ……気付いたらあんたの前で首一個になつてた。他の奴らを殺したことは後悔してるつて言つたらしてるかもしれないけど、あんまりしてないんだ」

「なぜじや？」

「そいつらは俺のことを最後まで化け物としか呼ばなかつた、軽蔑した目でしか見ていなかつた。でも、あいつだけは違つた。少なくとも俺を軽蔑した目でなんて見ていなかつた……あいつを殺してしまつたこの身体が一番憎い。つても俺の身体は今はあんたに吹き飛

ばされてないけどな」

女は黙っていた。男もただ目を瞑っていた。

「なあ、あんたの力で俺を殺すことって出来るよな？」

「……勿論出来る」

「なら、止め刺してくれないかな？ 俺はもう生きたくもないんだ。人を殺してばつかりの人生だつたしよ……このまま永遠に死ぬことすら出来ないなんて嫌だからさ、どうせこのまま元の身体に戻つたら狂っちゃうし」

「……そうじやな」

「悪いな、あんた1人にさせて、他の奴らは全員俺が殺してしまつたんだろう？」

「大丈夫じゃ、私は人間ではない」

「なんだよそれ？ おかしな冗談か？」

「ふふ。まあ死に逝くお前には関係ないじやろ？」

「それもそうだな」

女は男の頭を地面において、手に光を集めていき……そして、光が手から消えた。

「おいおい、失敗か？」

「……お前、過去に戻つてみないか？」

「はあ？」

男は女が言つていることの意味が理解出来なかつた。
女は男を無視して男の頭を再び自分の方へ持つていく。

「つまり、お前の身体が改造される前に戻つてみないかと、聞いておるのじや」

「戻れるのか……？」

「戻れなかつたら最初からこんな提案はせんわ」

「戻つたら、あいつは生きてるのか？」

「勿論じゅとも。誰かに殺されたりしていなかつたらな
「なんでそんな可能性があるんだ？ 過去に戻るつてことは今と変
わらないんじやないのか？」

「馬鹿者。お前が今の記憶と力を持つたまま、過去に戻つて何も変わらないことでも思つとるのか？ 断言しよう。私がお前を過去に戻したら何か絶対歴史が変わる」

「そりゃ……俺が殺した奴らはみんな生きてるだろうけど……」

「まあ何があつてもおかしくない世界だと思つてくれてい。自分の記憶はあてにならんぞ？」

「元々俺の記憶なんてほとんど無いんだから役に立たねーよ

「そうじゅなー！」

「だろ？」

「それで、どうする？」

「……」

男は考えた。

過去に戻つたとしてどうする？ この世界で自分が殺したのは変わりないし、戻つたからと云つて、何か必ず出来るというわけではない。

このまま死んだとしたら、絶対何も出来ない……。

「戻してくれるか？」

「む、そうするか？」

「ああ、このまま死んだとしても、俺は何も出来ない。もし過去に行つた世界で俺が何か出来るものがある可能性があるなら、俺はそつちに行く」

「安心しろ、確實にその世界にはお前にしかできないことがある。」

それに、その世界はこの世界とは確實に何かが違っている。用心するといい」

「なんで言い切れるんだよ」

「それは私が だからわ」

「は？ ちゃんと言えよ」

「ああ、もう過去に戻り始めたか。安心しろなんとなるお前なら
だつてなんとなる」

「だから、聞こえないって！」

「ああ、最後にお前の言つてた彼女の名前を、教えてやる。彼女は
確か セシル。 になつてるから助けてやれ」

重要な部分があんまり聞き取れなかつたな。と思いながら男は意
識を失つた。

巨大な石垣で周りを固めて、外からは何も見えないようにしている場所があった。

石垣の向こうには灰色の何かとても硬い物で固められた建物が建っていた。勿論その建物の中は何も見えない。窓一つとないのだ。そして建物の中は何者かを出さないためなのか、理由はわからぬが中は迷路のような構造になっている。

その迷路のような中の道を進みさらに分散されている道の奥の奥に男……いや、少年はいた。

その実験施設の中で両手を鎖で前に繋がれて拘束されている少年の体の中にドクンという音が鳴り響いた。

その体の中に男の記憶が移つたのである。代わりに今までの少年の記憶、人格も吹き飛んでしまった。

少年身体を乗つ取つた……と言つてもいいが、別にこのまま放つておいても大量殺人犯になるだけなので、元男は悪い気はしなかつた。

少しの間自分がどうこう状況でこうなったかということを思い出

すのにしばらくかかつたが、あの女の手の光を見ていたら過去に来たということ以外は思い出せなかつた。

意識が大分覚めて来た頃に、自分の状態がかなり不思議なことに気が付いた。

止まつてゐるのだ。

多分これはあの女が自分の状況を把握する為に用意してくれたものだらうと予想しておく。

周囲も止まつてゐるが、自分も止まつてゐるらしい。身体を動かすことは不可能だつた。

周りに自分を囲んでいる者達がいた。周りの風景からここは実験施設だとわかつたので、研究者だらうと悟つた。ここに来て意識を保つていた時間は魔法と武術を教え込まれた時とかなり長い時間だつたので、記憶が焼き付いていたらしい。

ゆっくり周りの状況を確認していくと、今自分が置かれている状況も段々とわかつてきた。

まず自分はどうぞ過去に戻つたかということだ。

これだけの研究者たちがいるということはもう自分は親に売られて研究施設に来たということははつきりしていし、まだ実験が開始されていないということから、確か16歳くらだつたということもわかつた。

しかし……と少年は頭を悩ます。

これだけの人数の人間がいて、しかも自分は手を拘束されている状態でどうやつてこの状況から逃げ出そつかど。

そういえば、と自分の魔法の力や身体能力はどうなつてゐるのかと疑問に思つた。

だが今はまだ周りが止まつた状態なので、どうすることも出来ない。もし能力が16歳の身体の状態のままだつたらという可能性もあるので、他の方法も考えることにした。

が、大体15年も前のことなんてそんなにはつきりと覚えている

わけがない。これだけの周りを見てここまでわかつたのが逆に驚きだ。とこの後の展開を思い出すのを放棄した。あとは周りの時間が動き出すのを待つばかりである。

「おいおい、いきなり黙つてどりしたんだ？」

周りの研究員が話しかけて来たので、時間が動き出したのがわかつた。

「もしかして、俺達にびびつて言葉もでなくなつたか？」

「うえへへ！」といつ下品な笑い声があがるが、少年は特に気にした様子もなく黙つていた。

「ちひ。なんだこの餓鬼。さつきまで喰いてたくせによ」「きつと恐怖で怯えきつちまつたんだって！ そつとしておいてやれよ！」

恐怖で怯える……といつことは実験内容を俺に話したところなのだろうか？ と心の中で考察する。これ以外に恐怖といつものと思いつかなかつたのだ。

自分の首を動かせるようになつたので、周りの研究者たちの数をざつと見て確認する。大体6、7人くらいだ。

「それじゃあ悪いが、眠つてもらおつか」

それは少しまずい。と心の中では焦つてはいたが表情にはださないようにしていた。

研究者が何やら注射見たいな物を手に持つて、少年に近付いてきた。

「ここは一か八か鎖を引きちぎれるかやつてみるしかないと考えて力を込めた。」

「！？ 研究長！ あの検体が鎖を引きちぎりました！」

「そんなことはわかっている！ わたしと押さえろ！」

「はっ！」

手首をかなり痛めたが少年はなんとか鎖を引きちぎるに成功した。

あとは周りの研究者たちを殺せば少しの間は安心でもると考え、周りの研究者を襲い始めた。

「ぐー！？」

まず手近にいた研究者を殴り飛ばした。

周りの奴らが茫然としている間に何人仕留められるかが勝負だ。それにもただ殴つただけで手がかなり痛い。少し力を加減する必要がありそうだ。

これが生身の体なのかと実感しながらも、前の体はどんなに強力だつたか改めて思い知った。

「一回引け！ そうしたらこの空間に催眠ガスを……」

その言葉の続きを研究員が言つことはできなかつた。なぜなら少年がその男の顔面を殴り、吹き飛ばしたからである。

今は手の痛みを気にしていられる状況ではないので、今出せる限りの力で周りの研究員たちを殴つた。

すると周りの研究者たちも状況が判断できるよになつて来たのか、逃げて行く奴らがほとんど、いや全員だつた。

「ここで魔法は使えるのかどうかを試して見ようと思つた。

最上級魔法術を使えればほとんど敵なしということはわかるが、ここで使って異変に気が付いたやるらが、違うフロアから増援が来ると厄介なので、下級魔法術使えるか試して見ることにした。

「下級魔法術 分裂魔法『五本の棘』」

紫色の小さな魔法陣が5つ田の前に現れ、魔法陣の中心から緑色の光線が5本飛んでいき逃げようとしている研究員たちに向かい、その胸を貫いた。

研究員たちは悲鳴をあげる暇もなく、口から血を吐きだしながら絶命した。

「とつあえず……だな」

戦闘したといつに、自分の意識が保てていることに少々違和感を感じながら少年は息をついた。

「わひと、ここからどうじょうか……」

とりあえず最初にやることのはこの研究施設から脱出することだと決めていたが、少年は折角過去に戻つて来たのだから、他のことをやってから逃げるというのも手だと思っていたのだ。

このまま一人で脱出するのもいいが、過去の自分と同じような目にあっている人はたくさんいたはずなので、その人たちを助けてから脱出するのもいいかもしれない。

少年が色々と悩んでいた時にいきなりガコン！と音がして、何かが動いているような音が鳴り響いた。その音は研究員の死体がある少し先の壁から鳴り響いていた。

「おこおこおい！ なんじゃこりゃあー？」

壁から少し低めの声が聞こえた。

「まさか、実験が失敗していたとは……面白いー。」

壁がくるりと反転して、そこから普通の人より一回りくらい大きく、やたらと筋肉質な男が出て来た。

「そこが隠し扉だったわけか」

「なんだよ、俺には目もくれないってかあ？」

男がにやにやしながらひらくと距離を詰めてくる。

「にしても、間抜けな奴らだよなー。」こいつら研究材料に殺されたんだぜ？」

「全くその通りだ」

筋肉質の男が死体を見て言つと、後ろから無愛想な男の声が聞こえた。

もう一人いふとはわからなかつたので、少し驚いた。
しかし、姿は見えていない。

「お前は上にここのことを報告していい。俺はこの材料を廃棄するつてな」

「わかった」

そう言つと無愛想な声の男が後ろの隠し扉に向かう背中だけ少し見えた。

背が低く、帽子を被つてゐることしか見えなかつた。髪の毛がはみ出でていなかつたので、そんなに髪の毛は長くないようだ。

そしてなぜか田の前の男は自らの上着を引き剥がした。腹筋が割られている。

「それじゃ、てめえには死んでもらおうか……」

筋肉質の男が少年に向かつてかなりのスピードで向かつてくる。と言つても前の世界にいた少年とは比べ物にならないほどの速さだが。少年の反射神経は引き継がれていたようで、その動きにはちゃんと対応できた。だが、体の動きは前の世界よりは遅くなっているので少々危なかった。

男は少年の顔を狙つていたようなので体を横にずらしてかわし、そこから男の腹に向かつて殴り、その瞬間後ろにバク転して距離を取つた。

今回は様子見という感じで全力の力では殴らなかつた。

「ほほう… 結構やるようだな！ 僕の予想では今の一撃で終わつていたんだがな。それに、今の拳結構効いたぜ」

そう言いながら男は笑つていた。戦いを楽しんでいる様子だ。

「まあまあ出来るようだし、本気でこっか！」

先ほどこちらに向かつて来たとおり同じくの速さで男はタックルする形で突進してきた。

そのまま後ろに下がつて避けることは難しいので、横にずれて回避。そこで魔法を使おうとしたが、男が早くて呪文を唱えることが出来ない。

魔法にも弱点があるのだ。

それは近くの敵には当てることが難しいことと、威力が高ければ高い程使う前と使つたあとに出来る長い隙だ。

それに、魔法を唱えている間はほとんど動かないことが原則なのである。なぜならば、移動しながら使うと詠唱に集中できず威力が落ちるからである。

あと魔法を撃つた後には少し反動があり、それも大きな隙になりかねないのである。

つまり相手が移動に特化している場合ほとんど魔法を使うわけにはいかないし、移動しながら使った所で当たらなければ意味がないし威力も落ちるので基本は接近戦になる。

なので基本魔法使いは後方支援としてしか戦闘には参加することなく、接近戦で魔法を使う者はほとんどいない。

「面倒な」

「はー? お前まさかこの俺に勝つ気でいるのかよー。」

返事はしない。

身体が局に屬る。かのては、体元に居たまゝにがんばらでゐる。

一々返事を返した所で生き残れる可能性が高くなることなんてないだろうから。

とは言つても話をしても無駄ではないといふでは話すだらうが。

「うそをついてはいけない。」

男が気合いと共に少年に向けて回し蹴りをした。勿論反応することは容易だったが、やはり体が付いてこない。それでも躊躇することは出来たので男は少年に対して隙を作つただけであつた。

今度はお返しとばかりに少年が回し蹴りを男の腹に打ち込んだ。しかし、その瞬間おかしなことが起きた。逆に少年が吹き飛ばさ

打ち付けられた瞬間に追撃されると思って、すぐに床から痛む体

を起こし男の姿を確認した。

男はにんまりとした顔で少年を見ていた。

今の反撃によって男は少年から主導権を取ったと思つてゐるらしい。

「……お前まさか反射使いか？」

「よく知つてるじゃねーか……」

男は少年に自分のことがばれてにんまり笑いが消えた。

反射使いとは防御魔法を相手の攻撃が当たる瞬間に使つた時に起ころる反射物理攻撃防御魔法術（元の攻撃の2倍の威力が相手に跳ね返る）を使える人のことを言う。

防御魔法は魔法使用者の前に見えない盾をだす呪文である。

もちろん防御魔法を攻撃が当たる前に使つておいて相手の攻撃を防ぐことも出来る。

防御魔法は呪文を唱えないで使えるので、便利である。

一見防御魔法はかなり優れた魔法にも思えるが、この魔法には落とし穴がある。防げる力よりも大きな威力の攻撃を食らうと当然だが一防御魔法（見えない盾）は砕けてしまう。

防御魔法は砕けるとすぐさま周囲の物と同調して、再び見えない盾を作ろうとする性質がある。これが厄介なのだ。

破壊された盾の1番近くにあるものは、盾を破壊した物であるからその破壊した物に同調しあじめてしまうのである。

そうすると防御魔法を砕いた攻撃に防御魔法の力も加わって自らに襲いかかって來るのである。つまり防御魔法で防げなかつた攻撃は、さらに防御魔法での力も加算されて襲つてくることになつてしまつのだ。

それに防御魔法は消費する魔力の量が多いので、後方支援の普通の魔法使いはあまり使うことはない。

接近戦を主体としている者にとってはかなり使い勝手のよいものになる。魔力の消費を気にすることなく戦えるというのも理由の1つだ。

ちなみに魔法を反射出来たとしても、魔法自体に威力が跳ね返るだけで相手にまで攻撃が跳ね返らないので意味がない。

「お前は最初の1撃を防がなかつたのはわざとか？ それで俺が油断したときにこの防御魔法の反射カウンタ使って一気に畳込む気だったのか？」

「よくわかるな。だが1撃目は本当に受けたのや。防がなかつたのではなくて、防げなかつた」

少年は男が答えを教えてくれるので自分が言ったことが正解だということがわかった。もしかしたら、少年を勘違いさせる為に嘘をついて言っているかもしれないが。

少年は体を起こしながら自らの身体の痛みに苛立つた。昔ならばこんな衝撃はすぐに治つたのだが、今は人の体なのでそもそもいかないうである。

それに自分の攻撃力の倍のダメージを食らつたので、人間の体では少々堪えた。

「なるほど。防げる場所が一定でないというならば最初から俺の攻撃を防いでいたと。ならお前は1部分しか防御出来ない下級の防御魔法しか使えないってわけか？」

「何もかもお見通しつてわけか。てめえ何者だ？」

「さあな。未来から来た化け物つて感じかな？ にしても、魔法を使える奴だったとは思わなかつたぜ」

魔法は何もしないと使えない。だが、魔法を絶対に使えない人間はない。ただ使えるように努力しないだけである。

なぜなら、魔法を使えるようになるまでは本当に大変な練習をしなければいけないからである。

魔法は1年2年と鍛えていくとやっと下級魔法が使えるようになる程度である。それも最初の方の威力は壁を少し焦がすくらいの威力だ。

そこからさらに鍛えていくと中級、上級魔法と使えるようになるとしていくのだが、ほとんどの人間は魔法を使えるようになるまでは鍛えない。なぜなら初めて魔法を使えるようになるまで最低でも1年間は必要とするし、実践で使えるようになるのはそこからさらに4、5年は鍛えないと戦闘では使えないからである。

少年は前の世界に居た時に無理矢理魔法を使えるようになされたので、苦労を知っている。なので田の前にいる男が魔法を使えることに驚いていた。

「お前みたいな筋肉馬鹿には、魔法は必要ないようにも見えるんだがな」

「ふざけやがって！」

男が再び少年に向かって突進してくる。体は痛いが、動かせない程ではない。

「さあどうする!? お前の攻撃はもう効かないぜ!?!？」

「言つておぐが、お前だけが防御魔法^{ブローテ}を使うつてわけじゃ、ねえんだよ!」

男が少年にぶつかる瞬間に男は逆の方に吹き飛んだ。少年も男に対して反射物理攻撃防御魔法を使ったのである。

「な、なぜ……俺はお前の複数箇所にぶつかったんだぞ」

「絶対不可侵の領域。お前は俺の領域に踏み込んだ。ただ、それだ

けだ

「上級魔法術だと!? それに、俺の攻撃を防いだ……な、なんで

お前みたいな小僧が……」

「子供だと思って、油断したか?」

「くそがあああ……」

男は喚きながら少年に殴りかかる。しかしその攻撃はやはり当たることなく逆に少年に反撃されてしまう。

そしてそれを男が反射物理防御魔法で跳ね返した瞬間にまたおかしなことが起きた。

反射物理防御魔法で跳ね返したはずの少年の攻撃の威力が、倍以上になつて自分に跳ね返つて来たのである。

男は衝撃で地面に転がり、尻餅をついた状態で少年の方を見ていた。

「げほ……な、なんで跳ね返らねえんだ……」

「その反射物理防御魔法をさらに反射物理防御魔法で跳ね返したんだ。まあ、難しいからお勧めはしないけどな」

通常反射物理防御魔法術をさらい反射物理防御魔法術で跳ね返すなんてことはありえないのだが、少年の前の世界で鍛えた反射神経がそれを可能にしていた。

男は尻餅をついたまま後ずさつた。それが命取りと知らずに。

少年はチャンスとばかりに魔法を詠唱する。

「中級魔法術 分裂魔法 ヴ十一の剣」

白くて縦に長く、四角形な魔法陣が少年の目の前に現れてそこから11本の白い何かが男に向かつて発射された。

「うわあああ！　くそつたのが！」

男は急いで立ち上がり、後ろに逃げながら1本2本の攻撃を防御魔法で防いだようだが、それ以外は防げず、自らの体に魔法が突き刺さり床に倒れた。意識を失ったかどうかはわからないが、かなりの深手を負つたのは間違ひなかつた。

「おかしいな……魔法の威力が前よりも下がつてゐる？…………ええ、他の応援が来る前に、脱出するとしよう」

少年はどうあえず、ソロから逃げ出すことにした。

2話（前書き）

遅くなつて、めんなさい

少し床に打ち付けられただけで痛む体に苛立ちを覚えながら少年は周りを見回した。

少年はさつき倒した筋肉質の男がさっき同じに来る前に帽子を被った男に言った言葉を思い出していた。

確かあの時は男が帽子男に俺はこいつを殺すからそれを伝えてこい。という感じのことを言っていたのでしばらくの間はここに居ても大丈夫だろうと思つた。

しかし、あまり長くいることは出来ないだろう。あの帽子の男だつて時間が経つて筋肉質の男が帰つて来なかつたら怪しく思つだろう。

この部屋から出る場所はわかつていたが、他に何かないかを探していた。

あそこから普通に通つてもいいが今地面に倒れている男がそこから来たことを考へると、あまりそこから通りたくはなかつた。

こいつが現れたのは隠し扉らしき壁からなので、他にも扉がないかを探すことにした。体が痛んでいたので、少し壁によしかかる感じになつていた。

「無駄だ」

さつき倒した筋肉質の男が話しかけてきた。どうやら意識は失つていなかつたらしい。

「なんだよ」

「他の扉を探しても無駄だと言つたんだ」

「そうかい。つて俺に教えてもいいのか?」

「やられた身だからな。もう動けやしねえよ」

男はそういうながら顔だけを前に向けた。

「それより、俺には止め刺さなくていいのか」

「ああ。お前には特に恨みがあるわけでもないからな」

「こいつらには何か恨みがあつたのか?」

「こいつらのことは研究者たちと予想して答える。

「ああ、こいつらは俺を酷いめに遭わせてくれたからな」

少年は男の言葉を信用していないかのように壁を入念に調べていた。

「お前……」

「なんだよ」

「まだ脱出諦めてねえんだつたら、さつさと俺が来た所から逃げやがれ」

「うるせえな……人のことは放つておいて、自分のことでも心配してやがれ」

本来ならば意識を失つてもおかしくない程のダメージを負つているはずなのだが、床に倒れている男は自身のかなり質のいい筋肉のおかげで致命傷にはならなかつたらしい。

「ここがどこだかわかつてんだろ？」奴隸収容所つて名前だが、本当は人体実験をしている施設で黙れ。下級直線魔法『貫ぐ槍』」

少年が手を床に倒れている男に向けると素早く黄色い小さな魔法陣が現れ、男の方に一本の短い光線が男の頭の少し前の方に突き刺さり、その衝撃で男はまた吹き飛ばされた。

「うおおおおー!?」
「ちつ……はずしたか」
「容赦ねえな！？」
「敵に容赦しない奴なんているのか？」
「それも……そうか」
「ああ、お前言いかけてたことだが。俺は全てを知っている。ここが人体実験場だってこともここを作ったのが聖都アクナシヤだつてこともな」
「……それで、でめえはどうするつもりなんだよ」
「とりあえずここからは脱出する。それからは特に考えてないし、考えていたとしてもお前なんかに教えねえよ」
「それも……そうだな」

少年は何か自らの拳と魔法以外の武器、剣などが欲しくなった。いくら下級魔法だからと言つて、何回も使っていたら魔法使う力がなくなつてしまふし、少年は格闘よりも剣術の方が得意なのである。

一通り隠し扉以外の壁を調べたが、特に変わつたものはなく時間の無駄だつたらしい。

「正面突破しか道はないのか」
「だろうな。てめえの命もきつとそこで終わりだ」

「お前が俺の運命を決めるなカス野郎。悪いが俺はまだ死ない身なんでね」

少年は隠し扉を通り進んだ。

男は後ろの方で何か言つていた気がしたが、特に気にもしなかった。

進んだ先にあつたのはエレベーターのような物で、ボタンを押せばその場所まで登つて行くことが出来るらしい。

階数を確認しようと、上方を見ると数字が21まであった。しかし順番は番号順ではなく、ばらばらだった。

「……どこの出口なんだ」

「この階は15の数字が見えるが、実際は15階なのかどうかも怪しい。なぜなら、次の階は3階だからである。」

「仕方ないから適当に行つてみるか」

多分一回このエレベーターを動かしたとしても少年を殺そうとしていた男が動かしているのだと思つて、特に気にもされることなく少年はエレベーターを使えるであろう。

少年はエレベーターに乗り込み、適当に次の階の3を押した。するとエレベーターは少し上に動いてから横に動いて、そこからさらに上に進み始めた。

横に移動するとは思つていなかつたので、少年は若干よろめきはしたが、転ぶことはなかつた。

「まさか、横に動くとは思わなかつた」

しかも一つ上の数字を押しただけで横に動いたり上に2回も動い

ている。昔はこんな所をどうやって通っていたのかも少年の記憶にはない。

ガクン！ と音がして扉が開くのかと思ひきや、今度は下に降下する感じがした。

チーンという音がして、今度こそ扉が開いた。

エレベーターを降りた部屋に出口らしきものが見当たらなかつた。周りにはただ剣や銃などが置いてある。多分武器庫か何かなのだろひ。

少年は普通の状況だつたならば喜んだ。自らが欲していた剣がそこに揃つてているのだから。

しかし、そこにはそれ以外のいらない物まであつたので、少年は素直には喜んでいる暇もなかつた。

なぜなら、武装した兵士らしき奴らが少年の方を見て武器を構えて待つていたらしい。ほとんどの兵士が銃をこちらへ向けている。

「……へ？」

「実験体152、戦闘部隊の副長からお前が逃げ出したと連絡を受けて、貴方を処刑しにきました」

「……嘘だろ？」

兵士たちの代表らしき奴が1歩前に出て少年に宣言した。

副長というのはさつき倒した男だろ？ と少年は疑問に思つた。もしやうなれば、止めを刺しておけばよかつたとも思つた。

ざつと兵士の数を数えると大体20人以上はいるようだ。しかも相手は武装しているので素手でダメージを与えるのは難しいだろう。

兵士の中に剣を持つている兵士がいたので、奪い取りたいと少年は考えていた。

後ろの方に立てかけてある剣を取りに行く暇はないと思つていた

からだ。

「実験体。抵抗しないのであれば、楽に死なさせてやるぞ！」

「……一つ聞こう。エレベーターを弄ったのは貴様らか？」

「勿論そうだ。あの装置が我らが操作しないで、あんな動きをする

わけないだろ？

つまつゝの兵士たちを全て片付けてからではないこと、先には進めないとこうことであら。

「わかつた。ならば、死んでもらおうか」

— ! !

少年はその場で静止したまま手を兵士の方へと向けた。

「中級魔法術　直線魔法　絶望の闇」

「まずい！」
撤退しろ！

少年の手のひらから黒い紋章が浮き上がり、紋章から暗い闇が溢れて部屋全体が闇に包まれていく。

「ウチの姉妹はお嬢様でーー。」

やけくそ氣味の兵士5、6人が自らが武装している銃で闇に向かつて撃つているが、全ての弾が吸収されるだけで闇の勢いは止まらない。

「無駄だ。魔法に対抗するには、もつと強い力じゃないと」「無茶だ！ 魔法が使えるだなんて、報告にないぞ！？」

兵士たちは成すがままに闇に飲み込まれていき、悲鳴をあげたりするだけで、少年を処刑しに来ている者たちとは到底思えなかつた。少年の心の中に、もしかしたら自分の情報が正しく伝わつてなく、わざと魔法を使えない奴らだけで來た。という考へがでたが油断はしなかつた。

「早く魔力拡散弾を撃て！！」

そう兵士の代表らしき人物が回りに指示をした。

代表といつより、周りに命令を下したりもしているのでリーダー格とでも言つた方が良いだらうか。

兵士たちが少年の放つた魔法に魔力拡散弾を撃ち込んでいくと、段々と魔法が分散していった。

「ああ」

少年は思い出したよに言つた。

「そういうれば、昔魔法も使えない凡人共が魔法使いに対抗するため作り出した兵器つてのがあつたな」

「貴様……！ 我らを愚弄するか！？」

「いや。そんな奴らの無駄な足掻きを思い出して憐れんでるんだよ」「この……クソガキがあああ！…」

リーダー格の兵士が俺に向かつて銃を撃つてくる。
もちろん魔法でガードすることも出来るだらうが、防ぐ必要もないでの躱すことにした。

「んな……銃弾を躱しただと？」

「そんなことに一々驚いていて、隙を作つていいのか？」

「…？」

と声では余裕そうに装つてはいたが、実際は反応出来ていても体が付いてこないので、ギリギリ躊躇したという感じであつた。

リーダー格の男が茫然としている間に少年はもうその男の隣にいた。

そして少年は男の顔面を思いつきり殴り飛ばした。

「ぐああ…」

「ドン！」と男は壁にぶつかり氣を失つたらしい。だが、少年はまだ攻撃をやめることはない。

「下級魔法術　直線魔法　『ログアーティムセントラリム貫く槍』」

ひゅんという音が聞こえたかと思うと、リーダー格の男が氣を失つている方に向かつてさらに魔法が放たれていた。

「そんな！　長！」

「なんでだよ……なんでそんなに容赦がねえんだ！」

さつきまで多数対1で少年を処刑しようとしていた奴らが言つ言葉ではないような気がするが、少年は黙つていた。あとは残りの2、3人の兵士を倒せば終わりである。

少年はまず剣を持つている兵士を狙つた。

少年の移動スピードは前の世界の時より落ちているとは言え、一般の人間から見ればかなり速いので兵士たちは動きに付いて行くことが出来ない。多少訓練しているとはいえ、前の世界の少年と比べれば全くしていないと言つていいくほどだらう。

剣を持っている兵士の脇腹を殴ると、呻きながら倒れ兵士は剣を地面に落とした。それを少年が軽々と拾う。

「うーん。久しぶりの剣だな」

少年の興味は剣の方に向けられて、まるで周りにもう敵はないかのように振る舞っている。脇腹を殴られた兵士はその場に蹲つていた。

「切れ味はどんなものなんだろうか」

少年はまるで日常の中にいる害虫を殺すかのように、何のためらいもなく近くにいた兵士の首を斬り飛ばした。

「え……」

残っていた兵士が思わず声にだしていた。

「うーん。まあ一般的の兵士が持っている剣だし、これくらいの強度なのかなあ……」

少年が振った剣をよく見ると若干だが剣が欠けていた。

「さて、と」

「うわああああああああああああああ！」

少年の言葉を聞いて次は自分だと思った兵士が発狂しながら銃を乱射した。少年は慌てず自分にあたる弾だけ剣で弾き、兵士に近付いていった。

そして兵士が銃を両手で構えているので下から上に向けて剣を斬

りあげて兵士の手を斬り落とした。

「あ、ああああ、ああああーー！」

自らの手が斬られた衝撃と感覚で情けない声をだしている兵士を少年は構わず蹴り飛ばした。蹴りの威力はそれほどなく、兵士を黙らさせただけであった。

だが少年はそれで満足したようで他の兵士がいないか周りを見回した。

「あれ？」

少年の感ではあと最低でも1人の兵士がいたはずなのだが、なぜか兵士の姿が見当たらなかつた。

もしかしたら、最初の闇の魔法に吸い込まれてどこかへ消えてしまつたのかもしれない。

これで少しゆっくり剣を選べるなと思いながら少年は剣がある場所へ歩いていった。

ほとんどの剣が自分が放った魔法で折れたり、砕けたり、中には消滅しているものもあつたが、ちゃんと形を保つている剣がたくさんあつた。

今少年が手にしている剣も兵士が持っていたので、結構良い剣なのだろうが、たつた1撃で欠けるような剣はあまり役に立たなさそうだったので、変わりの剣も探しておくことにした。

前の世界ならば、剣を5本程度背負っていても全くと言つていいくらい影響がなかつたが、今の状態では2本背負うのが限界だらうと思ひ、少年は適当に剣を1本背中に背負つた。

この中にあるものならば、大して1本1本に変わりはないと思つたからである。

と、少年が剣を背負つて歩き出した瞬間少年は地面に倒れてしまつた。

先ほどの男との戦いで受けた反射物理防御魔法術で食らったダメージがかなり残っていたようだ。

「やっぱり……自分の力は痛いな」

少年は負担を少しでも減らすために背中に背負つた剣を壁の方に投げて捨てた。

折角拾つたのに、と少年は思ったが自分の体の方が大事なので仕方なくそうした。

そして、少年はゆっくりとエレベーターの方に戻つて行つた。

3話 連れが1人増えた（前書き）

今回は書きたかった話の一つなので、ちょっと長いかもね

3話 連れが1人増えた

「待てよ……」

少年はエレベーターに乗り込んだが、足を止めた。

「このまままたエレベーターに乗つたら罷に仕掛けられるとか、そういう感じなのか？」

でもわっしきは連絡がいつて、兵士たちがこちらに対して仕掛けて来たのでまた兵士がやられるなんて思つてはいなはず。

それなら今度こそ1回くらい弄つても大丈夫ではないかと思い、少年はエレベーターの中に入った。

だが入つたと同時にエレベーターが勝手に動きだした。

「やっぱり、そういう感じなのかねえ……」

少年は諦めたように独り言をいつた。エレベーターはどんどんと上に向かつてあがつて行く。どうやら行き場所は上の階らしい。

エレベーターの中ではガコンガコンという音以外は何も聞こえず、突然どこからか攻撃が飛んで来るなんてことはなさそうだった。

それでもいきなり攻撃が来ないという保証はないので剣は手に持つたままにしておいた。

「お

チーンという音がして扉が開いた。どうやら田的の場所に着いたらしい。

少年がエレベーターから降りるとまた大きな部屋だった。

そこは少し前2部屋とは違う感じだった。

部屋の周りには水槽があり魚が泳いでいた。

そして部屋の奥には手を鎖で縛られ、磔られている少女がいた。体はあちこち汚れていて、髪が銀髪。結構少年と距離は離れていたので、その他詳しいことはよくわからなかつた。

「美しいだろ?」

「!?

少年が声のした方を向くと水槽のある所に寄りかかっている男がいた。

紅いメガネを掛けて、少し黄色めの髪。服装は全て黒く、コートが靡いていた。

風もないのにどうして? と少年は思つたが、とりあえず田の前にいる怪しい男を警戒していた。

「あの少女は精霊魔法使いだ。手に入れると苦労したよ」

「……」

「無視か。それもいい。ただ黙つて聞いてくれるだけでもね」

少年は田の前の黒い男を警戒しながらも話に耳を傾けていた。

「実験体152、君は実際に面白い」

男がぱちん! と指を鳴らすと鎖で縛られている少女の上の壁がずれて、画面が出て來た。

「このモニターから君を全て見ていたよ。いきなり研究員を殺したり、一応ここに戦闘部隊の副隊長を圧倒する姿も……ね」

「あんな奴が戦闘部隊の副隊長とは、笑わせるよ」

「君からしたらそうだろうね。にしても、本当に君は面白い。魔法の力にしても格闘にしても全てが私の予想以上だ。一体何時そんな技術を手に入れたんだい？ 私が見ていた中じゃ君はここに来るまでは全くと言つていいほど力がなかつた。なのに君はいきなり力だけで鎖を引きちぎつた。魔法も使つた。なぜここに連れて来られる前から使わなかつたのか、それとも使えなかつたのか。疑問は山ほどある」

「さあな。未来の俺からの、贈り物かもな」

「未来の君の力かい？ ククク……面白いことを言うじゃないか」

「ここには俺以外にも子供や実験対象が、いるんだろう？」

「正しく言つならば、この近くだがね。この精霊魔法師の少女もその1人だ。中々ガードが硬くて困つているのさ」

「……そうか、で、この部屋に俺を連れてきたのはお前なんだろ？」

「直接会つて話して見たかったからね。君は期待通りだつた」

「話すだけが目的だつたら、もう出て行つてもいいか？」

「それは困る。君は私達にとつても重要な存在だからね。大人しく改造されないか？」

「お断りだ、糞野郎」

「それなら仕方がない。力で支配をせてもらひよ」

「！」

黒い男がそう言つた瞬間にはもう少年の後ろに来て蹴りの構えを取りついていた。少年はその蹴りを反射物理防御魔法術で跳ね返すこととした。

「かあつ！」

男が掛け声とともに蹴りを放つ。タイミングよく防御魔法を発動。だが衝撃が来ない。不審に思つた瞬間に衝撃が来た。しかし自らの体に蹴りが当たる衝撃だった。

「……つー」

蹴り飛ばされながらも体制を整える。

そして自分の防御魔法が相手のただの蹴りで破られたことに驚いた。

「ふむ……その対応速度も素晴らしい。だが、まだ私でも勝てそうだな」

「何しやがつた……」

「君が反射物理防御魔法術で攻撃を跳ね返そうとしていることはわかつていた。だからタイミングをずらして君の防御魔法を貫いて君にダメージを与えただけさ」

「ただの打撃で上級魔法が壊されるのか…………？」

「そこらを理解していないところを見ると、まだまだだということだね」

「つ！ 黙れ！ 最上級魔法術 ^{ヒクストラ} 直線魔法 ^{ストレート} 『六芒星』 ^{キサグラム} ……」

「ほうつー！」

「んなー!?」

少年は驚いた。

何に驚いたかといふと自身が放つた最上級魔法に。なぜかと言うと前の世界で使っていた魔法の大きさの、約半分く

らこの大きさになっていたからである。

これでは前の世界にいた時に使っていた上級魔法より少し力が大きいくらいである。

「んん？ 驚くということは、予想外の何かが起つたようだね。
でも、ここからがさらに予想外だと思うよ。 下級魔法術 ロアグレーデ ストレ
法 セントラーム 「貫く槍」 センチタリム 」

男は少年の言葉を聞きながら、最上級魔法に対して下級魔法で対応した。

少年は例え少し力がなくなつたからと言つて、最上級魔法が下級魔法に負けるとは思つていないので、少しだけ気を緩めた……のだが。

「！」

少年の最上級魔法は男の放つた下級魔法によつて貫かれていた。
そしてその魔法は最上級魔法を貫くだけではなく、少年を貫く勢いで体の中心へと飛んで来ていた。

慌てて身を横に移動させようとするが、最上級魔法を使った反動で少し体の動きが鈍かつた。が、なんとか中心に当たることはなく、左肩を貫かれただけで済んだ。

少年の魔法と男の魔法を比べると男の魔法の方が圧倒的に小さいので、少年の魔法は貫かれていらない場所もある。ただ男は無傷でそこに立つていた。男の後ろの方で少年の魔法が壁にぶつかり壁を壊した。どうやらこの部屋の壁は魔法耐性があるようで少ししか壊れなかつた。

「まさか最上級魔法が下級魔法に貫かれるとはな……」

「君の魔法には多少だが弱い所が見えるのでね。そこを突けば簡単にいなすことが出来る。力だけが全てではない。小さき力でも1点に集中させれば大きな力となる」

「なんだよそれ、アドバイスか?」

「似たようなものさ」

どうやら前の世界よりもかなり魔法の力が弱くなっているらしい。少年は魔法では目の前の男には勝てないと想い剣で戦うことになった。

「今度は剣か。とにかく付き合つてやる!」

男も見えない所から黒い剣を出した。

何かカラクリがあるのかもしれない。もしくは、この世界では自分でも知らない魔法があるのかと色々と疑問に思つこともあつたが、目の前の男に集中することにした。

「はあああーー！」

「むんーー！」

少年の横からの重い1撃を男が黒い剣で受け止める。少年は片手で剣を持ち、男は両手で剣を持っていた。

少年は力を込めて男をそのまま斬り伏せるつもりだつたが、男の方が力が強く、逆に押され気味だつた。

少年はこのままだと勝てないと思い、力を抜いて下がつた。そして男が少し前へ乗り出す瞬間を狙い剣で首を狙い斬りつけた。

ガン！ といつ音が鳴り少年は後ろへと吹き飛ばされた。

吹き飛ばされている時に、自分は反射物理防御魔法術を食らつたのだと悟つた。剣は砕けてしまった。

しかし剣だけが反射物理防御魔法術に当たつたので、体にはそれほどダメージがなかつた。

「中々いいが、私もこれくらいなら使えるといつこと忘れて貰つては困る」

少年は息が切れていた。

男と戦う前にも少し攻撃を食らつていたし、ここに来て生身で攻撃を2回程受けっていたのも原因だが今の少年の体は体力が少ないのである。

16歳の平均的な体力はあるものの、生身になつたことで攻撃で痛みを感じるという緊張感がかなり神経をとがらせていて、さらには体力を削つっていた。

さきほど魔法で貫かれた左肩は当然だがかなり痛んでいる。

「休んでいる暇はない

「！？」

少年は男の様子を窺つていたのだが、男の速さが少年よりもかなり速く反応することすらギリギリだつた。

いきなり目の前に現れた（ように見えた）男が蹴りで少年を蹴り飛ばした。なんとか手でガードすることは出来たが、防御魔法を出すことまでは出来ず吹き飛ばされて鎖で繋がれている少女がいる上方の壁にぶつかつた。

「くそ……体中の痛みが消えないってこんな

「ロアグレイデ

「下級魔法術 分裂魔法

『ディッシュオン

クインティル

五本の棘』

「うああああああ！」

壁にぶつかつて止まっているところに男が魔法で追い打ちを掛け

てきた。

少年は体を捻つて躲そつとすると相手の魔法（5発飛んできている）を全て躱すことは出来ず、片足につ発食らってしまった。

「うぐ……」

そして上の壁から下の床まで少年は落ちてしまった。防御魔法を使おうとしたがうまくいかなかったようで、かなり体のダメージが酷かった。

男が少年のすぐ前に立っていた。少年はうつ伏せに倒れたままである。

「そろそろお休みの時間かな？」

「ふざけんなよ……三下があ！――」

「ふむ、そう言つなら私を倒してからにしたまえ」

魔法が当たらなかつた方の足で勢いをつけて男に向かつて体当たりに向かう。そんなことをしても無駄だとはわかつていたが、体が痛くてそれしか出来なかつた。

「ただ直線に突っ込んででも当たらんべ」

男は横によけて少年をかわす。

ここまで予想していた少年は男のいた場所で自身の体を止め、そこから回し蹴りをした。

「むうっー・」

男はこれが予想外だつたらしく、蹴りを受け止め自分から距離を離してくれた。

少年は手を男の方に向けた。これが最後のチャンスだな、と思いながら。

「エクストラ 最上級魔法術 直線魔法 『キサグラム 六芒星』！」

呪文を唱えた。
が、手のひらに紋章は出ない。

「！？」

「ははははは！… 君にも限界があるんじゃないか！ どうやら魔法を使えなくなつてようだね」

終わった……。

少年は悟った。

またあの世界のように精神が狂うんだ。そしてまたこの世界も元の世界のようになる……。

結局ここに戻つて来た意味はなかつた。元の世界で死んでいた方がましだつたかもしれないという考えが少年の心を支配していく。

「そろそろ寝たまえ。君は十分にやつた」

いつの間にか周りこんでいた男に後ろから蹴られる。身構えていなかつたので人形のように吹き飛ばされた。

そして少女が鎖で縛られている近くまで来て、やつと止まつた。これで体が全く動かなくなつた。意識はあるが、何も出来ないとには変わりない。

「回収班。私だ。すぐ部屋に来てくれ。あと清掃

」

男がどこかへ向かつて連絡を取つているらしい。今となつてはど

うでもいいが。

「諦めるの？」

かなり小さい声だった。それが少女の発した声だと気が付くのに少し時間がかかった。

「諦めたくはない。でも無理なんだ」

少年も小さい声でかえす。いや、小さい声しか出せないと言った方正しい。

「どうして？」

少女が聞き返していく。少年は自分の状況を見てわからないのか？ と少し苛立つたがこれが最後の会話となるかもしないので、黙っていた。

「体が動かない」

「どうして？」

「見てみるよ……体中傷だらけで動きたくても動けねえんだよ」

「だから諦めるの？」

「……ああ」

「諦めちゃ駄目。諦めたらどうにかなることもならなによ」

「この状況で諦める以外の選択肢があるのか……？」

「信じれば、私が力を貸すことが出来る。だから、諦めないで」

田の前の少女が言っている言葉をなんとなくだけれど信じたくなつた。

少年は自分の体を無理矢理にでも起き上りさせようとした。

「だな……なんだか」のまま寝そべつてゐるは悔しかや

「その調子。“光よ、彼を癒せ”」

光が少年の体を包んでいく。

「なんだ……これ？」

少年は自分の体の痛みが段々と引いていくを感じた。体も少しずつ動けるようになつていく。

「ね。どうにかなったしょ？」

「ああ、お前凄いな」

「えつへん」

普通自分でえつへんなんて言つか? と思いつながら自分たちが置かれている状況が、そんなことを思つてゐる時ではないといつことに気が付いた。

まだあの男はこの部屋にいるんだ。

でも、俺の傷が癒えたことにはまだ気が付いていないはずだ。

あの男は例え力のない物でも力をとどめれば固めれば強いとか言つていたことを少年は思い出していた。

今なら魔法も使える気はしたが、最上級魔法など使う気にはなれなかつたのである。

どうせなら直前まで気が付かれないように下級魔法を使うことに決めた。

「下級 直線魔法」
ロアグレーデ ストレート

小声で唱え、狙いを男の方へと向ける。

少年はこんなにこつそりと相手を狙うのは初めてだなと思った。

「『ヤンチタリム貫く槍』」

少年は魔法を出来るだけ集中して1点ことごとく意識した。

「ん？」

少年が魔法を放つといつもよりも小さく鋭い形をした魔法が男に向かつて飛んで行った。

しかも速さがいつもの倍以上だ。

男が魔法に気が付いたかどうかはわからないが、少年の方へと振り向いたときにはもう男の胸を貫いていた。

「んが！？」

魔法は男を貫いただけではなく、さらに後ろの（恐らく）魔法耐性のある壁に穴を開けた。

「すげえ……」

男のちょっととしたアドバイスだと思っていたことが、少し集中してやつただけで威力がかなり上がった。

「まさか……まだ動けたとは……ぐつ」

「動けたのは自分の力じゃねえ。この子のおかげだ」「なるほど……精霊の加護か」

男は苦しそうに仰向けに倒れていた。

胸を貫かれたのにまだまだ動けそうに見えて少年は身構えたままだった。

「お前が俺にアドバイスしてなかつたら、俺は今殺されてたかもな」「ふふふ……構わんよ。なぜなら私はお前を強くするのが望みだからな」

「なんだそれ」

「いつかわかる。それまで生きてることだな」

少年は今度中級魔法や上級魔法にも試して見ようと考えていた。今あの黒い服を着た男にトドメを刺しに行くのもいいとも思ったが、何だか嫌な予感もしていたので少年は男は放つておくことにした。

「とりあえず、今度はここんな所からおせいばだ。……とお前はどうしたい?」

少年が少女に話しかけると返答がかなり早く返ってきた。

「連れてって
「わかった」

少年は少女の鎖を手で引きちぎった。すると少女は床にペタンと座り込んだ。かなり疲れているのだろうと思つて気にしないで鎖を取り作業に戻つた。

が鎖を根本から切つても金属の輪は取れない。せういえば自分もこの輪は取れていなかつたなど呑気に考える。

とりあえずここを出てから魔法で削り取らうと思つてエレベーターに向かおうとするとき鍵が飛んできた。

「それで全員の鍵が外れる。さつさとしませ」

「本當か？」

「嘘は言わない。それに、その手に嵌めたまま研究所リサーチを出られた方が困る」

「なるほどね……」

つまり周りの何も知らない、一般的の奴らには知られたくないということだろう。

少年は自分の輪を外してから少女の輪も全て取った。

「立てるか？」

「立てない」

「……乗るか？」

少年が背を向けて少女を乗りやすいようにする。

「うん、でも貴方の服が汚れる」

「多少だ。気にするな」

「わかった」

少女は少年の首から手を回し、また。少年はよいじょつと言いつながら少女を背負つた。

「軽いな」

さつき少女が施してくれた精靈魔法（多分）のおかげで体の状態が元の状態まで戻つたようだ。

少年がエレベーターまで戻りつとすると少女に止められた。

「どうした？」

「やつちじやない。」うづか

少女はHレベーターの方ではない、右の方向を指せしていた。

「本当か？」

「うん」

少年は少女の言葉を信じて右の方向へ進んでいく。だが、右の方向には水槽の壁しかない。

「ああ、一つ言つておいつ」

少年が壁の方へ向かっていると男の声がした。

「まだ気失つてなかつたのか」

「勿論この程度じゃ……ね。ただ君が私と戦おうとしないから」「いつやって寝そべつているだけ。それで、君に一つ忠告しておいつと思つてね」

「なんだよ」

「ここからは十分に注意して行動するべきだ。君以上に強い者はたくさんいる。私より強い者だつてな」

「それはもう十分理解したつもりだよ……」

「ならない。それと、一応名乗つておいつ。私はラドンだ。また会おう、実験体152」

「会つたかねえよ」

少年は話を聞きながら壁の方まで廻りついたので、少女に再び聞いた。

「ここでいいのか？」

「うん。壊して」

「……辛い」と言つてくれるじゃないの

この壁を殴つて壊すには痛いだらうし、魔法で壊すにしても一苦労するだらう。

でも壁を殴つて痛い思いをするよりは魔法を使つた方がいい気がして少年は魔法を使うことにした。

「中級魔法術 分裂魔法 ディフューション ウンデカル
インダーメリー の剣」

今度は分裂魔法、またの名を複数魔法とも呼ばれる魔法で少年はさつき放つた魔法の威力をあげたように、これも威力を上げようとしたが、今度は1点集中ではないのでコントロールが出来ず、いつもとあまり変わらない威力だつた。

「練習が必要だな……ん？」

壁に突き刺さつた11本の剣は壁を裂いていた。そしてその先には通路が見えた。

「ね

「凄いな、お前」

少年は感心したように言いながらその通路へと向かって歩いて行つた。

「そうだ」「どうかしたのか？」

少年が少女を背負つたまま通路を歩いていると背中の少女が話しかけてきた。

「貴方の名前って、何？」

「名前……？　ああ、なんだっけかな……。ずっと実験体152とか152とかでしか呼ばれてなかつたから覚えてないんだよな」「そうなの？」

「そうなの」

「じゃ、私がつけてあげるよ」

「いや……いいよ」

「貴方は魔法も使えるし剣も使えるから、魔法戦士？　騎士？」

「人の話を聞かない奴め……戦士のがあつてんんじゃないかな？　俺は馬に乗つたりはしないし」

「じゃ騎士で」

「おいら」

「魔法騎士……」

少年の背中で少女は名前を考えているらしく。

少年にしてみれば結構な迷惑だつたりもあるのだが。

「うん。貴方の名前はシキijoひ」

「騎士を逆にしてシキってか?」

「なぜばれた」

「おい」

「駄目?」

「いや……まあいいや」

少年 シキは気軽にさうに言った。

「短くて覚えやすくていい……かな。お前の名前は何でいいんだ?」

「セシリア・ティスター」

「セシ!? ……と違つたか。悪いなんでもない」

「?」

シキは少女 セシリアが前の世界の女が言っていた昔殺してしまつた女性の名前に似ていたので少し驚いた。

「あー。でこからせりひやつて進んでいくか知つてるか?」

「うん。真っ直ぐ進んで、落ちればいいの」

「落ちる?」

「行けばわかる」

「そうなのか」

シキはさう言われてから何も言わないで進んで行った。後ろにいるセシリアも黙つて肩に?まつたまま黙つていた。
しばらく歩いていくと通路の終わりが見えてきた。

「お、もうすぐか

「そつみみたい。下に気を付けてね
「ああん？ うおつー！」」

気を付けてと言つ意味が出口の近くまで来るまでよくわからなかつたが、出口まで来たら意味がわかつた。

通路の先は道がなかつたのである。

シキはどうやってここを超えるのかと周りを見渡したが、向こう側に道は続いてないし壁にも隠し扉のようなものは見つからなかつた。

「うーーーーー……どうすればいいんだ？」
「簡単。落ちればいいの」
「は？」
「大丈夫。私が補佐するから」
「……信じるからな」
「任せて」

シキは思い切つて通路から飛び出した。

前の世界の体だつたならば、シキは普通に落ちても平氣であつた

だろうが、今は状況が違う。

全ては後ろに？まつているセシリ亞に掛かつていろと言つても過言ではないのだが、シキに？まつてている手が少しそうと強くなつたので不安になつてきていた。

大丈夫……なんだよな？

落下スピードがどんどん上がつて行くが、まだまだ地面が見えてこない。

シキはいざとなつたら自分で魔法を地面に向けて使って、止まるかはわからないがやってみよつと思つていた。

「ん？」

トの方を見ていると小さな点が見えて来た。きっと誰かいるのだ
うつと思いつつも面倒だと思った。

りと戦うのにならんだりからだ。

が、ハーバードに通った。

それでも凄い速さで落ちているなあと呑気に考える。
だ。

「そろそろかな。」“光よ、私達を保護せよ”

セシリ亞がそう何かの呪文を唱えるとシキとセシリ亞の周りに少し淡い水色の光が包み込んだ。
速度は全く変わつていない。

「え？　まさか、これだけ？」

「……安心でしょ？」

思わずシキは悲鳴をあげてしまつた。

ズドーンという音が響き渡り、シキ達が落下した場所はかなりへこんでいたが、シキ達は無傷だった。

「すげーな……精靈魔法」

「ぐつ！」

「いやだからやつこいつとは眞葉にして表をなこと思つやがへ。」

セシリ亞は指をぐつとシキの顔の前に出していった。

「つでこんな」としてゐる場合ぢやないよな

上から落ちてぐるときによく見た人影は全て敵のはずなので、氣を緩めてはいられない。

「ん？」

周りをよく見てみるとおかしな状況だつた。

シキはまだ何もしていないので、周りでは兵士らしき人たちが倒れているのである。

「もしかしたら、俺たちみたいにここから逃げ出やうとしている奴がいるのか？」

「わからない。でも好都合」

「だな」

「」から道を確認してみると、この部屋の向こうに扉があつた。その扉を開けると通路に繋がつていた。通路は一本道のようなので、もしかしたらここを通つていけば兵士を倒した人に会えるかもしれない。

シキは進み始めたが、相変わらずセシリ亞を背負つたままである。もしこのまま戦闘をすることになつたら若干辛い気がしていたが降ろす気にはならなかつた。

さつきの部屋にいた男くらの強さを持つ奴ならば、降ろさなければいけないだろうが。

「音が聞こえる」

「本当だ。誰か戦ってるみたいだな」

通路を進んでいくと扉があり、その向こうから音が聞こえていた。シキは戦っている人がどんな奴なのかがわからなかつたので、慎重に姿が見られないようにしながら扉を開けた。

扉の中では少し身長が大きめの男が周りの人たちをどんどん殴り飛ばしていた。

偶に攻撃を食らつたりもするが反射物理防衛魔法術で跳ね返している様子だった。

と動きを観察していると、あることにシキが気が付いた。

それは、今戦っている男が先ほどシキが戦っていたやたらと筋肉が凄い男だったのである。

「……あいつ何やってんだ?」

「知り合い?」

「んー……。やつを殺し合いをした仲?」

「そつなんだ」

といつより、なぜあの男が今動けているのかと言つことか疑問だつた。

先ほどシキがあの男に魔法を食らわさせてから、まだ1時間程度しか経っていないというのに、奴は見た目元気そうに動き回りながら戦っているのである。

「そんなことはどうでもいいか

「うん?」

「なんでもない」

「？」

問題はあいつをどうするかである。

そのまま放つておいたら周りの敵を全て倒して進んでくれるかもしれないが、きっとあいつだって倒せない敵がその内いるはずだし。それにあいつが出口に向かっているとも限らないのでどうしていいかわからない。

「助けてあげたら？」

「ん？」

「あの人ピンチだよ」

「あ」

シキが再びあの筋肉男の方を見ると周りの人たちに取り押さえられていた。

あいつあんなに弱かつたのだろうか？　とシキはまた考え始めた。さつき戦った時のダメージが残っているのではないだろうか。

「仕方ない。一応助けておくか。あいつくらいなら、きっと倒せる
だろうし。中級魔法術 インターメリ 分裂魔法 ディブション 『十一の剣』^{ウンドカル}」

シキは扉から手を突出し、筋肉男を押さえつけている研究員たちに向かって魔法を放った。

放った直後に力を1点に纏めておく。ということを忘れていたので、練習しておけばよかったと後悔した。が、ちゃんと魔法は敵に当たったようで、研究員たちは倒れた。

「久しぶりだな。お前そんなに弱かつたのか？」

「……誰かと思ったら、てめえかよ」

「おいおい、助けてやったんだから少しばは感謝しそうよ」

シキは話しかけながら男に近付いて行く。勿論警戒することを忘
れずに。

「…………ありがとう」

「うおー!? 本当に言いいやがつたー!?」

「なんだよー 言えつて言つたのはてめえじゃねえかーー!」

「いや、すまん。本当に悪いとは思つてなかつた」

シキは男の傍に寄つて腰を下ろした。

なんとなくだが、男がこちらに対して攻撃してくるとは思えなか
つたのである。

もし、攻撃されたとしても防御魔法を発動させたらなんとかなる
と思つたのも理由の一つだが。

「…………お前、よく生きてるな」

「実際死にそくなつたけど、ここにおかげで何とかなつた」

そう言つてシキは後ろにまだまつたまままでいるセシリ亞を指さ
した。

「むー、ここつじやなくてセシリ亞」

「はーはー。で、お前に聞きたいことあるんだけど、いいか?」

「…………セシリ亞? お前……まさかあの人から逃げ延びたのか?」

「ん? あーあの黒い奴? 逃げれたけど? ギリギリで」

「嘘だろ……あの人から逃げ切るだなんて……お前やつぱりなんか
おかしいぞ」

「そうですか。別にどうでもいいですよ。で、聞きたいことがあります
んだが?」

「あ、ああ。助けられた身だからな。答えることなり答えてやろ
うじゃねえか」

「助かる。じゃ、一気に質問するから答える物から言つてくれ。
まず、なぜお前はそんなにも元気に動けている？ 僕が魔法でん
なにも串刺しにしたのにも関わらず無事で居られるのはなぜだ？
そしてお前はなぜ他の仲間から狙われている？ もしくは自分から
敵対している？ そしてお前はこの研究室から出る場所を知つてい
るか？ もし知つているのなら教えてほしい」

「本当に一気に来たな。まあ、全て答えられるから答へよう。まず
俺が普通に動けてるのは回復結晶つて言われているまあ、戦闘屋おれら
みたいなにしか知られてないものを使つたからだ。そして俺がな
ぜ他の奴らを倒して行つているかというのは、俺がここから排除さ
れようとしているからだ。そして最後の質問だが、もちろん知つて
いる。俺は研究所に勤めて結構経つてるからな」

男は全ての質問に答えた氣でいるらしいが、シキは一番最後の教
えてくれるか？ という質問を言つていったことに気付いていた。
それに、新しいことも知りたくなつた。回復結晶とかと呼ばれる
結晶（なのは定かではないが）のことだ。

前の世界ではそのような物は知らなかつたし、それにこの世界で
手に入れることが出来ればかなり有利になるだろうと思つたからだ。

「それで ちょっと待つた」

「あん？ まあ俺も少し休憩するとするか」

シキはこの男を利用出来ないかと考えていた。

先ほどまでは敵だったとはいゝ、今この男との目的は同じだし、
この男に付いて行けば何の罠にも嵌らずに出口まで行ける。

そこから先は考えていながら、出口までという契約で共に行動し

ていたら結構ここから楽に進むことが出来るはずだ。仮にもいいの戦闘部隊の副隊長だつたらしいので。

「なあ、俺とお前は目的一緒にだよな？」

「まあ、そうなるな」

「ならよ、俺たちとこの研究所から出るまででいい。協力しないか？ 俺も結構強い方だと思ってるし、役に立つと思つぞ？」

「……少し考えててくれ」

そういうと男はぼんやりと宙を見上げていた。

シキはそういうえばこの男の名前知らないなーと、のんびり考えいた。断られた時にどうするかは特に考えていなかつた。10分くらい経つた後に男が言つた。

「決めた。組むつ」

「お、そう決めてくれると嬉しい。少し前まで敵だったが、ここからは一応仲間だな」

「ああ。よろしく頼む。俺はガスタス・ウェルマーだ」

「おう。俺は……えーと、シキだ。背中に乗つてる奴はセシリシアだ。精霊魔法使いらしいぞ」

「そいつはつえーな」

「……」

「？」

後ろからの反応がないので、少しシキは不審に思つたが気にしないことにした。

隣にいた男はガスタスと名乗つた。

シキは昔にもこんな名前の奴がいた気もしたが、忘れることにした。

「さてと、それじゃあ行きますか！」

ガスタンスは立ち上がった。

シキも従つてゆつくりと立ち上がる。

「ここからどうやって進んでいくのかは全てお前に任せる。頼むぞ」「わかった。奴らが来たときは頼りにするぜ。それに、まだあいつがいるからな」

「あいつ……？」

「さつきお前と初めて会つたときに一緒にいた男だ」

「ああ、あの帽子被つてた小さい男か」

「あいつが今のところ1番厄介な敵になるはずだ」

「わかった。油断しないで行こう」

「勿論だ。付いて来い」

ガスタンスに付いて行きながらシキは後ろに背負つている少女を見た。

さつきから反応がないと思つたら寝ていたのである。

しかし腕はちゃんとシキに？またままなので落ちる心配はないだろう。

「困つたな……」

ガスタンスに気付かれないくらいの声でシキがそつとつぶやいた。

このまま後ろで寝ている少女を放つておいてもいいのだが、敵との戦闘になつた場合結構面倒になるかもしれないからだ。

今シキが遠距離攻撃できるものと言えば魔法くらいしかないので、他の戦いは全て格闘になる。

その場合後ろにいる少女が耐えられるかどうか。

と言つてもそういう場合は後ろで寝ている少女を起こせば問題な

いのだが、シキには選択肢として頭に現れなかつた。

「ガスタス」

「なんだ」

「俺の連れが寝てる。すまないが、魔法援護だけでいいだろ？」

「その、帽子被った奴が来たときはちゃんと起こすからさ」

「……十分だ。と言つよりも雑魚研究員など、俺の力だけで十分だ

わ！」

「そうか。なら全部任せる」

「おうーーー！」

さつきやられそうになつっていたのはどこのだいつだ。とシキは心中で思つていたが言葉には出さないでいた。

雑魚敵を全て戦わずに済むのならば、楽なものである。

ガスタスは人が3人程度並んで歩けるような通路を進んで行つていた。

シキはその後ろをゆっくりと進んでいく。後ろからも敵が来る可能性もあるので、後ろの警戒も忘れないでいた。

ただ進んでいるだけで会話はほとんどないので、シキは先ほどどの質問でガスタスが言つていた回復結晶のことを聞いてみることにした。

「さつき言つてた回復結晶つてよ

「ん？ 気になるのか」

「ああ。それと高価な物なのか

「そりやあ、おめえどんな傷でも死なない限りはほとんど回復するからな。結構高いぞ。確か3エルーと20ルートくらいだったはずだ」

エルーとルコートというのは、この世界の通貨である。

ルコートというのは一番低いもので、エルーというのは50ルコートで1エルー。そしてエルーの上にはシルエと呼ばれる通貨もある。

ちなみに1シルエは20エルーである。

「まじかよ……それって1個でだよな？」

「ああ。そうだ」

「高いな……」

便利なものだがかなり高価なものだつたらしい。

確かにほとんどの傷が治るというのには惹かれるが、そんなにお金を出して買う程も価値はないな。とシキは思った。

「おっと。敵さんの登場だ。言つておくが、ここからあと少しで研究所から出られるからな」

「そうなのか。じゃ、頑張ってくれ。危なくなつたら魔法で援護するから」

「任せろ!」

通路の向こう側から兵士が2人でこちらへ向かつて来ていた。

相手は銃を持っており、既にこちらへ撃とうと構えていた。

シキは防御魔法を使いながら回避しようとし、ガスタスは真正面から突撃していった。

「おおおおおーー！」

ガスタスが兵士の1人の顔面を殴り、相手をよろめかせた。 1
回の攻撃で倒れない所を見ると結構なやり手であるようだ。

ガスタスが兵士を殴った隙を見て、もう1人の兵士がガスタスに

向かつて銃を撃つが、それはガスタンの防御魔法で跳ね返された。

シキは出来るだけ相手に気付かれないように動かなかつた。こちらへ攻撃が飛んでもると背負つている少女に衝撃が響きそうであつたから。という理由を頭の中で考え、本心は戦うのが面倒だから動かなかつた。

ガスタンはよろめいていた兵士にもう2撃を与えて、相手を倒した。そしてもう1人の腹に強烈な1撃を与えて倒していた。

「そつちは大丈夫か？」
「ああ、1撃も食らつてない」
「そうか。お、お前あの光が見えるか？」
「どれだよ」
「？」

ガスタンは少し向こう側にある壁を指さしながらシキに聞いた。シキは光っている所など見えなかつたので不思議に思った。

「やっぱり俺らみたいな関係者じゃなかつたら見えないのか……もうその壁を通れば出口だ」

シキはその光とやらが見えなかつたのでただガスタンの後に付いて行つた。

「ここだ」

ガスタンが指さしている壁の前まで來たが、他の壁と違つ所がシキにはよくわからなかつた。

そうしていようとガスタンスがその壁を手で殴るような形で押した。すると扉が開きちょっと小さめな部屋への入り口になっていた。

「人体実験場は迷路かカラクリ屋敷か？」

「否定は出来ねえな」

2人が部屋に入ると少し先に扉が見えた。

「あれで出れるのか？ 何かあつさりとこれたな」

「だが、ここからは簡単には通さん！…」

「！？」

上から声が聞こえた瞬間に上から小柄な男が降ってきた。帽子を被り自分の身長の約2倍くらいの剣を持っている。

「ちつ！ 来やがったか……クエスター！」

「さつき会つたばかりだがなガスタンス！ それにしても、お前らまで出口に来ているとは、情報にはなかつたんだが……」

そういう日の前の帽子男クエスターは剣を縦に構えながらシキの方を見た。

「セシリ亞、起きる。また後で背負つてやるから少し床に座つてろ」「うー……？ わかったー」

セシリ亞は寝惚けている様子でぼやーとしているが、ちゃんと言われた通りに床に座つた。

まだ半分寝ているといった感じだらう。

「さて、こいつを倒さねえと進めないぞ？ 気合い入れろ！… 小

僧一！」

「されなくともうひつぱみ、みのじじー。」

5話（前書き）

また遅くなつていぬんなさい

「それで？ 何か作戦とかあるのか？」
「あるわけないだろ？ こいつと会うのなんぞ、計算に入つてなかつたんだからな」

「おいおい、さつき会いたくねえとか言つてなかつたつけか？」
「知るか。さつさと倒してここから逃げるぞ！」

ガスタスはそう言つてクエスターの方へ突撃して行つた。

「ログアーティレ
下級魔法術 分裂魔法 ディフューション
『五本の棘』^{クインティル}

シキはガスタスに合わせて分裂魔法をクエスターの方へと放つた。

「ほう。意外にいい組み合わせのよう……だな！」
「！？」

だな！ と言つた瞬間クエスターは呪文を唱えることなく同じ分裂魔法を放つてシキの魔法を防ぎ、そしてガスタスと戦闘を始めた。シキはかなり驚いたが、ガスタスは驚くことがなかつた。

呪文を唱えないで魔法を使うなんてことは前の世界ではあり

えないことだつたはず……！

シキは自身の心の中で困惑っていた。

「この世界には自分の知らないことがたくさんあります」と。

「シキ。今のは無音魔法。サイレントマジック普段呪文を唱えて発動するよりも威力は落ちるけど、速さだけを求めるなら一番の技、だよ。あの人、シキの魔法と同じ威力をこの技で放てるってことはかなり強いから『氣』を付けて！」

「あ、ああ……」

後ろにいたセシリ亞が説明してくれた。どうやらこの世界では常識の範囲内だつたらしい。

シキにしてみれば常識はずれもいいところなのが。

「参つたな……すぐに放たれる魔法の対処法なんて知らねえぞ……」

田の前でガスタスがクエスターの剣をギリギリで躱し、懷に入ろうとするが中々うまくいってなかつた。

「インターメリー中級魔法術 分裂魔法 ヴディフシオン十一の剣』！

シキは隙を見て間からクエスターに向かつて魔法を放つが、全て剣で往なされたり、無音魔法とやらで防がれてしまった。

「ん？」

シキはクエスターが使う魔法に違和感を感じた。

シキの魔法を相殺出来る程の威力の無音魔法を使えるというのならば、なぜ今の魔法は中級呪文で相殺したのではなく剣と下級呪文を合わせて躱したのだろうか。

中級魔法を使わなかつたこと、ガスタスにはかなり隙を見せてしまつたはずだ。

それでも1撃もまだ食らつてはいないようなので、クエスタが強いのかガスタスが弱いのかのどっちかであろう。

シキがガスタスの援護をしているとはいへ、このままだつたらガスタスはクエスタに負けてしまつだろう。

今2対1の状況でガスタスは押され氣味で反撃など出来そうもない。

「仕方ない。使いたくなかつたけど、やつたみるか。ガスタス！！
下がれえ！！」

「あん！？ うおっ！ わあつた！ さがりやあいいんだろーー！」

シキが話かけたその時にクエスタの剣がガスタスを貫きそこになつた。危うく躰しながらガスタスは後ろに下がつていつた。

「最上級魔法術 エクストラ 直線魔法ストレート……」

シキはクエスタのいる範囲だけに魔法をとどめるよつて集中しながら呪文を唱える。

「『キサグラム 六芒星』……」

呪文はラドンと言つていた男と戦つていた時よりも小さく、そして鋭くなつてクエスタの方へと向かつていく。

「むん！？」

クエスタが気合いと共に剣で最上級呪文を防ごうとしていた。い

くらなんでも不可能であろうとシキは予測していた。

剣と魔法がぶつかつた瞬間に爆発が起こりクエスタの姿は見えなくなつた。

「……やつたか？」

シキが隣まで来ていたガスタスに訊いた。

「わからねえ。だが、奴を甘く見ない方がいいな。それにしても、お前まさか最上級魔法使いだつたとはな」

「まあな。今じゃ雑魚最上級魔法使いですけど」

「なんだそれ、皮肉か？」

「いや」

実際この世界に来てからそうなのであるうと、シキは思つていた。「この世界にいる最上級魔法使いならば、自分よりも数倍強い奴らがいるのであろうとシキは予想していた。

「それにしても中々現れな……」

「！！」

ガスタスが話していた途中に胸を何かで貫かれていた。

シキがその何かを、理解するのに数秒かかってしまい、すぐ近くまでクエスタが近付いていたことに反応できなかつた。

「ふん！」

「つ！」

近付いていたクエスタはシキを蹴り飛ばすとガスタスに突き刺して、いた剣を抜いた。

「んがあ……てめえ、ほんとんどダメージ当たつてねえのかよ……」
「あの程度の最上級魔法では死ぬほどエクストラの傷は受けない。少しは食らつたがな」

この世界の奴らは化け物ばかりだな。と心の中で思いつつ
シキは苦笑した。

エクストラ最上級魔法を生身で食らつても生きている奴なんて前の世界では
ありえなかつたことだ。

シキの魔法が少し弱くなつた。といつ所為もあるかもしれないが。

「シキ。貴方は剣使えるの？」

「ああ？ まあな。そこらの奴らよりは使えるはずだが……」

少し遠くの方からセシリ亞の声が聞こえてきた。

「なら、私を信じてくれる？」

「またそれか？ いいぜ、信じてやるよ。何を信じるかは知らんけど」

「！ シキ！ 行つて！！」

「お、おう」

セシリ亞が急いだように言つた意味がよくわからなかつたが、クエスターとガスタスの方を見た瞬間に理解し、そつちへ向かつて全速で掛けに行く。

ガスタスがクエスターにトドメを刺されそうになつていたのだ。抵抗しているとはいえ、胸を貫かれているガスタスが最初戦ついた時よりも動きが悪くなつていた。

「シキ。貴方は剣を持っている！ “光よ、彼に力を”」

後ろから聞こえてきたセシリ亞の声の意味がわかりづらいな。と思いつながらシキは頭の中で自分が剣を持っていると信じる。

ただ単に剣を持っていると信じてと言つてくれれば何も迷わずにそのことを考えられるのだが、言いきられてしまつと、今までに剣を持つていると錯覚してしまいそうだった。

剣は自分の手に現れていなかつたが、きっと精霊魔法使いのセシリ亞が言うのだから何か魔法を発動させてくれるのだろう。と信じてシキはクエスタに斬りかかつた。

シキの手はまだ何も掴んでいなかつたが、剣を持っている感じで相手の剣に当てる感じでぶつかり合つた。これで何も起こらなかつたらシキはただ隙を見せただけである。

なぜこんなにも彼女を信じれるのか。シキ自身もわかつていなかつたが、考えることは一旦預けることにした。

「むー？」

ガキン！ と音がしてクエスタの剣が何かとぶつかり合つた音がした。

「貴様……！ まさか……！」

クエスタがかなり驚いている。実際シキの方が驚いているのだが。シキは光で出来たような剣を持っていた。実際に剣自体が光つているのでもしかしたら光で本当にできているのかもしね。

剣と光で出来た剣で鍔迫り合いをしていると、クエスタの方から距離を置いた。

「……これは、思ったより厄介じゃないか」

「大丈夫か？」

クエスターの言葉を無視してガスタスの方へと声をかける。

「なんとかな……だが、もう戦闘じゃ足手まといにならうだ
「そうか。なら下がつて居る。ここからは俺がやる」

シキはそう言つたあとクエスターの方へと突つ込んで行つた。もう
魔法は使わないことにしたのである。

「はつー。」

クエスターは無言で魔法を放つてきた。

魔法の数が5つだったので、下級の分裂魔法だと判断した。

3つの魔法を掠るくらいのギリギリのところで躰し、他の2つは
剣で叩き落した。

「なんだ……この感覚……甘いのかで……」

シキはなんとなく咳きながら、クエスターと剣をぶつかりあつた。
キン！ という音が部屋に響く。

クエスターの動きは見た目通り素早く懐に迫る隙がなかつた。しか
も少しづつ後ろに下がりながら戦つてくるので、追い詰めるのが難
しい。

一方シキは攻めているが、クエスターにダメージを与えられず、逆
に少しづつ傷を受け始めていた。

だがシキは傷を受ける度に自分の神経が段々と研ぎ澄まされてい
く感じがしていた。

そして、クエスターの攻撃の速さが遅く感じるよりもなつて来て
いた。

「終わりだあ！！」

クエスターがそう言いながらシキの方へと迫ってくる。

この行動は初めてなのでシキは一瞬動きを止めた。

そしてクエスターはシキのちょっと手前辺りで、自分の体を横に回転させながらこちらへと向かってきた。

しかもその回転速度は恐ろしい程速かつた。クエスターの射程範囲に入つたらすぐさま細切れにされてしまいそうだった。

「シキイ！！ 下がれ！！」

ガススタスが叫んだがシキは無視した。

なぜか自分ならばあの回転斬りを捌くことが出来る気がしたからだ。

シキは田の前で回転している男が具合を悪くすることはないのだろ？ と本当にどうでもいいことを思いながら回転している剣に軽く自分の剣をぶつける。

剣が手から離れそうになつたがなんとか持ちこたえた。クエスターの剣の勢いは消え去り一瞬その場に剣が停止していた。

これで回転は止まつた。が、今度は逆回転しはじめた。しかし今度はゆっくりと回転していた。

どうしてそんなにゆっくりなのかはわからなかつたが、大きい隙が出来ていたのでシキは迷わずクエスターの方へと向かつた。

「せいやあ！！」

「！」

シキが近付いて行くとクエスターが剣の動きをいきなり変えて、ま

た逆方向に急に回転させ始めた。

シキは近付いてくる剣とは逆の手に剣を持っていた。

もしシキが逆の手に剣を持っていたならば、簡単に彼の攻撃を凌ぐことが出来たであろう。

「小僧!」

ガスタンスが声を上げる。だが、シキの姿はどこにもなかった。

「え?」

ガスタンスが呆けたように言った。

シキが細切れになつたのかもしないとも思つたが、クエスタの周りに血が飛び散つていたりしなかつたので、それはないと確信した。

それに、ガスタンスはクエスタよりもちょっと奥の方にいるシキの姿を確認したので安心した。

逆にクエスタはかなり辛そうな表情をしていた。

「ぐ、ああああああああああ!」

「!?!」

シキは自分があのとき元ビーフやつてここまで来たか覚えていなかつた。

ほとんど無意識と言つてもいいのだが、若干移動する前にやつたことは覚えていた。

クエスタの右腕を斬り落としたのである。

が、シキにとつてはそんなことはどうでもよかつた。今自分に起

きていく異変の方が重要だった。

「 シキ、貴様ああー！」

後ろの方でクエスタが悶えている声が聞こえたが、シキは無視した。

自分の何かがおかしくなっているものを探っていた。

体が勝手に動こうとし、全てを壊したくなる衝動が襲つてくる。

「 嘘だら……これって昔の衝動じゃ……！」

シキは後ろからクエスタが襲いかかって来る可能性もあったが、シキは自分の体を抑えるのに集中し始めた。

「まさか、魔力解放を使った？」

オーバーマジック

セシリ亞は誰にも聞こえないような声でぼそりとつぶやいた。

「シキ。貴方は何者なの……。にしても、暴走している？ 止めな

めや」

セシリ亞はシキが何かおかしいことに気が付いて傍に寄つて行つた。

「シキ。大丈夫？」

「つ！ セシ……リア。は、離れてろ」

「安心して。もう終わつたよ」

そう言いながらセシリアはシキに抱き着いた。

「！？」

シキの体はセシリアが抱き着いている場所から力が抜けて行き、その場に倒れ込んでしまった。

「これも……精霊魔法なのか？」

「違うよ。私は何もしていないよ」

シキは体に力が入らなくなつて床に倒れたままでいた。だが、悪い氣はしなかつた。

それと、この感覚は昔にも味わつたことがある気もしていた。

「なあ。セシリア」

「？」

「お前の名前つて本当にセシリアなのか？」

「そうだよ？」

「……そうか。悪い」

「？」

セシリアはシキの顔を不思議そつに見つめていた。

「そついえば敵は？」

「大丈夫。彼が倒した。安心していく」

「ああ……」

セシリ亞はシキの頭を持ち上げて自分の太ももに乗せた。要するに膝枕である。

シキがセシリ亞の方を見ると、彼女はニコニコと笑っていた。その顔を見るとなぜだかシキは安心してセシリ亞に体を預けていた。

数分してシキは体に力が入るようになつたので、ガスタンスの様子を見に行くことにした。

本当ならばガスタンスの方が相当な重傷だつたのだが、シキは自分の体のことばかり考えていて彼が怪我をしているということを忘れていた。

今まで体に力が入らなくて、そちらへ行けなかつたと理由付けして忘れていたことを隠そうと思いながらシキはガスタンスの方へと向かつた。後ろからセシリ亞も付いて来ている。

「ガスタンス。無事か？」

ガスタンスは床に胡坐をかきながらくつろいでいた。

「ああ、こいつが持つてた回復結晶を押借したからな」

ガスタスは薄い色の結晶をシキ達に見せながら言った。

「普通に盗んだって言えよ」

「まあ！ その扉を出れば「この国ともおわりば出来るんだ！」 関係ねえよ！」

「あつそうかい。……とセシリ亞はもひがけるな？」

「うん。歩く」

「よし」

シキはそのまま外へと続く扉へ向かおうとしたが、ふと立ち止まりクエスターの方を見る。

「こいつ死んだのか？」

「いや、お前らが何かやつてる間に俺が後ろから殴つただけだから死んではいなはずだ」

「よくあの状態でお前動けたな」

「体だけは丈夫なんでね！」

「ほう……なら今度俺の最上級魔法でも食らつてみるか？」

「死ぬわー！」

「えー」

軽口をたたきながらシキ達は扉を開けてその場所から出て行つた

……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6914w/>

魔法騎士と精靈魔法師

2011年10月11日19時55分発行